

市史通信

【目次】

- 成長と閉塞の時代
— YOKOHAMA1968
- 「学生鳥人」森謙吾
- 半井清と飛鳥田一雄
— 二人の市長の人物像をめぐって
- 閲覧資料紹介
『横浜の映像』(1969年刊)
- 市史資料室たより



ステージで歌うザ・ゴールデン・カップス 1967年頃 ©アルタミラミュージック
中央のボーカルがリーダーのデイヴ平尾。1966年12月結成/1972年1月解散であるがメンバーの入れ替わりは激しかった。「長い髪の少女」「愛する君に」のヒット曲で知られる。2004年再結成。

第33号

【発行日】2018年11月30日
【編集・発行】横浜市史資料室
〒220-0032
横浜市西区老松町1番地
横浜市中央図書館・地下1階
【電話】045-251-3260
【FAX】045-251-7321
【E-mail】
so-sisriyou@city.yokohama.jp
【ホームページ】
<http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/org/gyosei/sisi/>

成長と閉塞の時代

— YOKOHAMA1968

今回、横浜市史資料室で「YOKOHAMA1968 — 50年前、日本が最も熱かったあの1年」と題するミニ展示を企画した理由を述べたい。

近年1968年をテーマとする、いくつかの注目すべき著書や展示図録が公刊された。タイトルに「1968」を冠したものだけでも、学園紛争を中心に詳論した、小熊英二著『1968』上・下(二〇〇九年刊)の名著や、国立歴史民俗博物館編『1968年』無数の問いの噴出の時代(二〇一七年刊)があり、文化変容をとらえた、小野俊太郎著『明治百年 もうひとつの1968』(二〇二二年刊)や、四方田犬彦編著『1968 「1」文化』・四方田・福岡健二編『1968 「2」文学』・四方田・中条省平編『1968 「3」漫画』(いずれも二〇一八年刊)がある。また、「新装版」と銘打った二〇一〇年の、奥村博史編『1968年グラフィティ』(元版・一九九八年刊)は、世相を含めた1968年の全容を捉えようとした企画で、毎日新聞社発行ならではの内外の豊富な報道写真を盛り込んだ一書である。いずれも高度成長後期〜低成長期〜バブル経済期〜「失われた二〇年」と続く、その後の半世紀がたどった混沌の時代のスタートをこの一年に求めているように思われる。

地域史として語りうるのか、という視点で取り組んだのが、今回のミニ展示である。狭小なスペースではあるが、再来年に創業一三〇年を迎える神奈川新聞社の特別協力を得て、内容豊かな記事と写真とを展示に利用することができた。また株式会社アルタミラピクチャーズ及び平尾静子様・池田貴美子様からは、ザ・ゴールデン・カップスの写真・資料のご提供を得た。深く感謝の意を表する次第である。

飛鳥田市政の1968年

飛鳥田革新市政の誕生は、一九六三(昭和三八)年四月である。そしてその重要政策としての「六大事業」(①中心地区整備、②富岡・金沢地先埋立、③港北ニュータウン建設、④都市高速鉄道建設、⑤都市高速道路網建設、⑥横浜ベイブリッジ建設)が打ち出されたのは六五年一月であった。

1968年は、飛鳥田市政にとって大きな組織的改編を実施し、「六大事業」の本格的な着手がなされた年、と位置づける。「縦割り」で弊害が多いと揶揄される行政組織を、横断的に調整する「企画調整室」が総務局内にできたのがこの年。のちに企画調整局として独立する。また企画調整室と同時に「市民局」も新設された。

半井市政下で本格的に取り組まれた根岸湾の埋立が大企業の工場用地創出を主目的としたものであったことに対して、富岡・金沢地先埋立は、市内の都

ベトナム戦の緊張を一時解かれた帰休兵が楽しみ、散財に訪れる横浜は、当時の日本人の若者にとって、流行の先端をゆくあこがれのダンスステッパや音楽が集約する場となっていた。

若者たちの情熱の行方

68年1月9日、マラソン選手の円谷幸吉が自死した。メキシコ五輪での活躍を期待する世間のまなざしと、アキレス腱の負傷で思うように走れないことを気に病んだ末の選択であった。活躍に期待を寄せた世間は、この青年の心のきしみをうかがい知ることはなかった。勤勉・誠実といった戦後復興を支えた日本人の心根が、ポキッと折れてしまったような孤独な死であった。

豊かな生活を願い走りつつけてきた高度成長の日本にもきしみが生じていた。生産重視による生活環境の悪化、巨大化した企業、そして政治体制への批判が芽生え、ふくらんでいた。アメリカの傘の下での「平和」と「成長」への疑問は、ブラウン管を通じてもたらされるベトナム戦の非人間的な光景によって助長された。しかしながらアメリカを相対化すべき社会主義陣営のソ連も、「プラハの春」への軍事介入によって信頼を失っていた。

1968年に成年を迎えた世代は、戦後復興・高度成長とともに成長した若者であった。政治的に目覚めた者たちは、自らが所属する学園での民主化運動や、米軍向けのジェット燃料を積

む貨車(米タン)を線路上に座り込んで阻止するなどの、反ベトナム戦争の直接行動に向かった。

金があれば手に入れられないものはなくなった時代であった、ファッションも過激かつ個性的になり、麻薬を吸ったときに見るサイケデリックで刺激的色使いが尖端的となっていた。そして尖端的な「男のおしゃれ」が話題となる時代であった。

桜木町駅前のゴーゴー店で踊り疲れた一九才の無職の若者は新聞記者のインタビューに答えている。「不満」ここを白い目でみるおとなたち、「楽しみ」エレキにしびれ踊ること、「主張・要求」かわった服装をしたり、こんなところへこられるのも若いうちだけ、若い時遊んでもあまりおとなは文句をいふな、「将来の夢」平凡な生活、「もしこんな場所がなくなったら」気が狂う……。一八才の会社社長の娘は「私たちの十年後はどうなるのでしょうか」と逆に記者に問いかける。「強烈な刺激だけがジュニアを救っている現在、強烈な刺激だけがこのままエスカレートして十年もたてば私たちはどうなるのか」なぜ踊りに行くのと、よく聞かれるけど、そこにロック調の歌とゴーゴーの踊れる場所があるからだわね。一回行っただけでとりつかれ、中毒症状のようになっていく。こんなものどどん作っていく大人が悪いのよ」(京浜ぶらり探訪⑥不安な未来像からの逃避? / グループサウンズ大繁盛)「神奈川新聞」

1968年3月8日)。

ゴーゴーに白い目を向けるのも、ゴーゴー店をつくるのも同じ「大人」世代であることを看破しつつも、未来を描けない閉塞感のなかでもだえていた。

当時の若者たちをとらえていたものは、現場に臨んで感得できるシビレるような刺激であり、それをつきつめたところに得られる陶酔といえた。それは学園紛争に取り組む者も、エレキギターの音に熱狂して踊る者も、同じ精神的基盤にあった。

本牧のライヴ店の名前を冠した、ザ・ゴールドデン・カップスは、当時芸界を席巻していたグループサウンズの一つと見なされがちであるが、帰休兵の音楽的欲求を満足させる演奏を提供した本格的なリズム&ブルースのバンドであった。メンバーの一人がPX担当の軍属を父に持つ日系アメリカ人であり、最新の全米ヒット曲を演奏に反映させることができたのである。1968年に発表された初アルバムには、日本語曲とともに、英国ロックの名曲である、プロコル・ハルム「青い影」のカバー曲が元歌公開のわずか一〇ヶ月後の時点で収録されていた。日本での彼らの洋楽情報の吸収力は他のグループが及ばぬ地平にあった。

しかしながら、ザ・ゴールドデン・カップスは、他のアイドルグループにルックス面で劣るところがなかった。リーダーであるデイヴ平尾に対して、熱狂

的なファンが当時の芸能雑誌のグラビアページを切り抜いて貼り付け、自らの思いを詩に託して編集したスクラップ帳四冊が平尾家に残っている。自作の詩の一篇には「私の貴方への一方的な愛 自然の中で微笑 貴方は私の憧れ：けれど私の住んでいる世界と貴方の住んでいらつしやる世界とは遠く離れているのです 夜毎夜毎の星の流れに貴方への愛はつるるばかりです 貴方は信じて下さいませるか」。ファンとして自分のために集めるのではなく、大好きな「時坊」(平尾の愛称)への思いを伝えるための努力。ファンの行為もかつてなく熱い時代であった。(平野正裕)



横浜駅東口スカイビルのゴーゴー店「ZEN」1969年 広報課写真資料
スカイビルは1968年3月オープン。「ZEN」は広大なスカイ体育館を同年11月に改装したもの。カップスも公演や録音に使い、アルバム「スーパーライヴ・セッション」では「ゼンのブルース」(歌:ケネス伊東)が収録された。